平成30年度に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人東京芸術大学

１ 全体評価

東京芸術大学は、我が国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、教育研究と社会連携活動の推進を通じて我が国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことを使命としている。第３期中期目標期間においては、世界最高峰の芸術大学への飛躍を目指し、国際舞台で活躍できる卓越した芸術家・研究者を育成することや、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進すること等を基本的な目標に掲げている。

この目標の達成に向け、学長のリーダーシップの下、芸術文化実践活動を促進する単位修得型の実践的教育プログラムを実施するとともに、世界トップアーティストの戦略的育成に向けた一貫型人材育成プログラムを構築するなど、「法人の基本的な目標」に沿って計画的に取り組んでいることが認められる。

（「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について）

第３期中期目標期間における「戦略性が高く意欲的な目標・計画」について、平成30年度は主に以下の取組を実施し、法人の機能強化に向けて積極的に取り組んでいる。

○　芸術文化実践活動を促進する単位修得型の実践的教育プログラム「アーツスタディ・アブロードプログラム（Arts Study Abroad Program:ASAP）」を開講し、デンマークのコリングデザインスクールとの共同授業「北欧がつくるデザイン・社会・デモクラシーを学ぶ」やフランス国立映画学校との共同授業「GEIDAI-FEMIS WORKSHOP in Paris2018」等計12件のプロジェクトを国際共同授業として実施し、99名の学生が参加している。また、既存の国際協働カリキュラム・コースワークを実施するとともに、新たに南カリフォルニア大学と「日米ゲームクリエイション共同プログラム」を開始するなど、６つのコースワークを整備している。（ユニット「海外一線級アーティストユニット誘致を基軸とした「グローバル展開戦略」」に関する取組）

○　世界の芸術系大学の強み・特色の明確を図るためのブランディングシステム構築のため、学生や教職員、卒業生からのアイデア募集により、大学における今後の広報・ブランディング戦略の根幹及び指針を定めるため、「誰にでも分かる短い言葉でブランドの魅力を伝える表現」「そのブランドがどんな独自の価値を提供できるか」の宣言文である「タグライン」として、「世界を変える創造の源泉」と策定している。（ユニット「マネジメント人材の獲得・登用や人事・給与システム改革等による大学経営力強化戦略」に関する取組）

２ 項目別評価

＜評価結果の概況＞

	特　筆	一定の注目事項	順　調	おおむね順調	遅れ	重大な改善事項
（１）業務運営の改善及び効率化			○			
（２）財務内容の改善			○			
（３）自己点検・評価及び情報提供			○			
（４）その他業務運営		○				

Ⅰ．業務運営・財務内容等の状況

（１）業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善　②教育研究組織の見直し　③事務等の効率化・合理化

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる
（理由）　年度計画の記載８事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

平成30年度の実績のうち、下記の事項について**課題**がある。

○ 入学者選抜における業務上のミス

平成31年度前期課程入試において、業務上のミスがあり、実技の一次試験の追加合格の措置を実施していることから、チェック体制の見直し等、再発防止に向けた組織的な取組を引き続き実施することが望まれる。

（２）財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加　②経費の抑制　③資産の運用管理の改善

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる
（理由）　年度計画の記載５事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

（３）自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実　②情報公開や情報発信等の推進

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

（理由）　年度計画の記載４事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

（４）その他業務運営に関する重要目標

①施設設備の整備・活用等及び安全管理　②安全管理　③法令遵守

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでおり一定の注目事項がある

（理由）　年度計画の記載７事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、一定以上の注目すべき点があること等を総合的に勘案したことによる。

平成 30 年度の実績のうち、下記の事項について**注目**される。

○ 地域に開かれたキャンパスの実現

キャンパスの環境改善の一環として「藝大ヘッジー4・植樹ワークショップ」を開催し、クラウドファンディングによる経費の一部支援や社会福祉法人進和学園いのちの森づくり友の会からの苗木260本の寄贈を活用するとともに、学生・教職員、OB・OG、地域の方を含む一般参加者、台東区役所環境課の職員の約60名の参加者と約870 本の苗木を植えるなど、地域に開かれたキャンパスづくりを実現している。

○ 国際藝術リソースセンターの竣工による教育研究・社会連携・情報発信機能の強化

大学が有する過去・現在・未来の藝術資源の保存や活用、世界に向けての発信を担う施設として、東京藝術大学国際藝術リソースセンター（IRCA : International Resource Center of the Arts）を創設し、株式会社小学館との共同事業として開設した「藝大アートプラザ」では、大学の学生・卒業生等の作品を「常設展」及び「企画展」として展示・販売や学生・卒業生等のキャリア支援を展開するなど、教育研究成果を広く社会に発信している。

Ⅱ．教育研究等の質の向上の状況

平成30年度の実績のうち、下記の事項について**注目**される。

○ ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミーとの人材育成に係る協定の締結による音楽分野における世界トップアーティストの戦略的育成

音楽分野における世界トップアーティストの戦略的育成を目的として、「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と人材育成に係る協定（特別選抜制度）を締結している。同アカデミーが大学と人材育成に係る連携協定を締結するのは世界初であり、ヴァイオリン部門には「東京藝術大学枠」が設けられ、審査に合格した派遣者には寄附金を原資とする奨学金サポートが実施されるなど、世界トップアーティストの戦略的育成に向けた一貫型人材育成プログラムが構築されている。

○ 「日米ゲームクリエイション共同プログラム」の開始、『東京藝術大学ゲーム学科（仮）「第０年次」』展の開催

ゲーム教育分野で北米トップに君臨する南カリフォルニア大学（USC）との持続的かつ緊密な連携協力体制を基盤に、日米産業界とのネットワークを活用しながら、COIL(Collaborative Online International Learning；オンライン国際交流学習)型教育と実際の渡航を組み合わせ、新時代のメディアアーティストを養成する国際共同プログラム構築の一環として、映像研究科と大学のCOI 拠点及び株式会社スクウェア・エニックス、株式会社Luminous Productions との連携による『東京藝術大学ゲーム学科（仮）「第０年次」』展を開催したほか、学生をUSC に派遣し、ゲーム制作に係る講義やワークショップを実施している。

○ 文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室による慧日寺・薬師如来坐像の復元

平成27年度より復元制作に協力の上、実施してきた慧日寺（福島県磐梯町）の周丈六薬師如来坐像の復元が完成し完成披露式が実施されている。復元制作においては、自治体による積極的な文化財の保護・活用と地元に拠点を置く企業の理解とサポート、大学が培ってきた技術や知見が揃うことで実現しており、大学の研究成果を社会に還元することができている。